

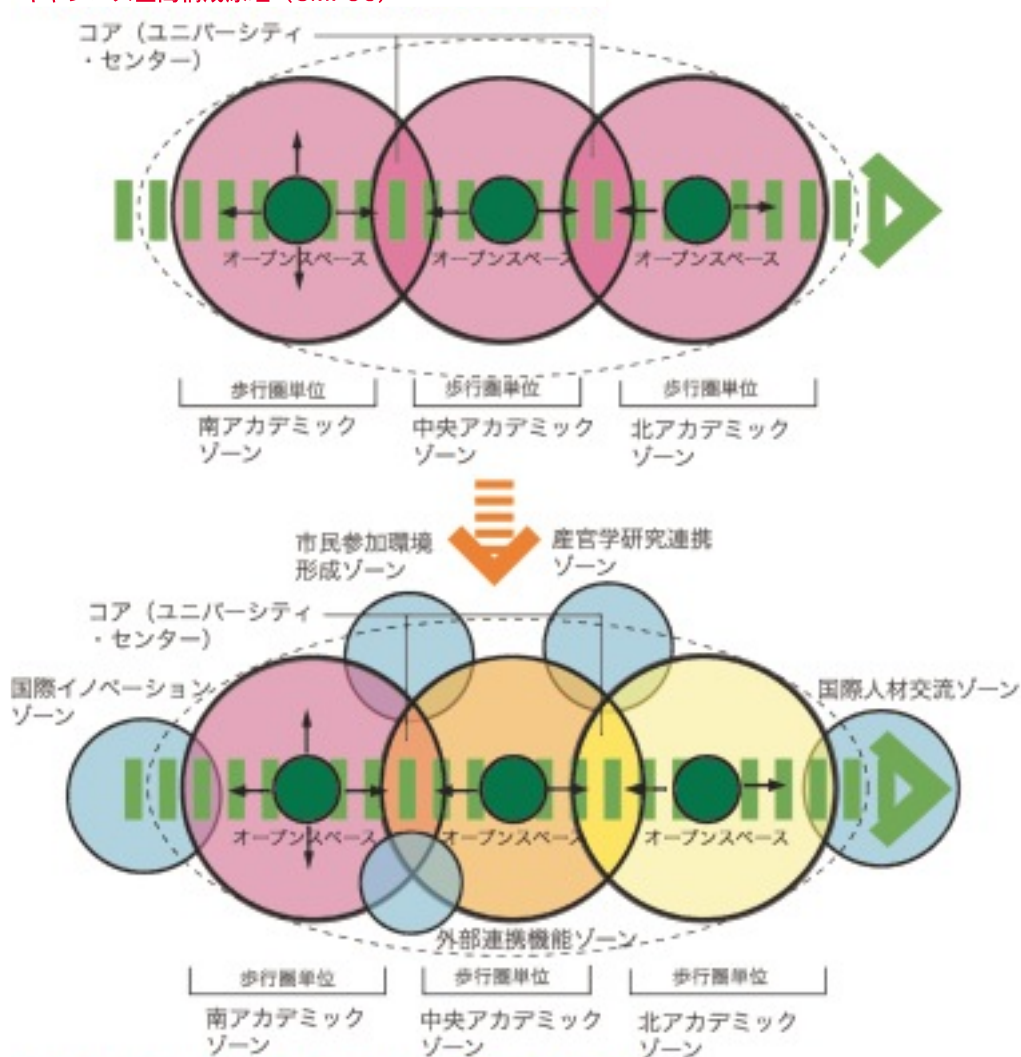
4. キャンパスの空間構成

4-1 キャンパスマスタープラン 2006 の空間構成原理

知の世紀・21世紀へのアカデミックプランを前提に、CMP 96 を発展させ、以下の目標を加え、CMP 2006 の構成原理とする。

- ① 北キャンパスの空間的位置付け
- ② 歩行圏として完結しうる教育・研究の場（アカデミック・ゾーン）の空間的構成
- ③ 全学共用施設を中核として構成されるユニバーシティ・センターの空間的構成
- ④ 新たな構成単位としてのコミュニティ・ゾーン
- ⑤ 国際交流ゾーンの明確な位置付け
- ⑥ 周辺地域と連携した土地利用
- ⑦ 新たな構成単位としてのコミュニティ・ゾーン

キャンパス空間構成原理（CMP96）

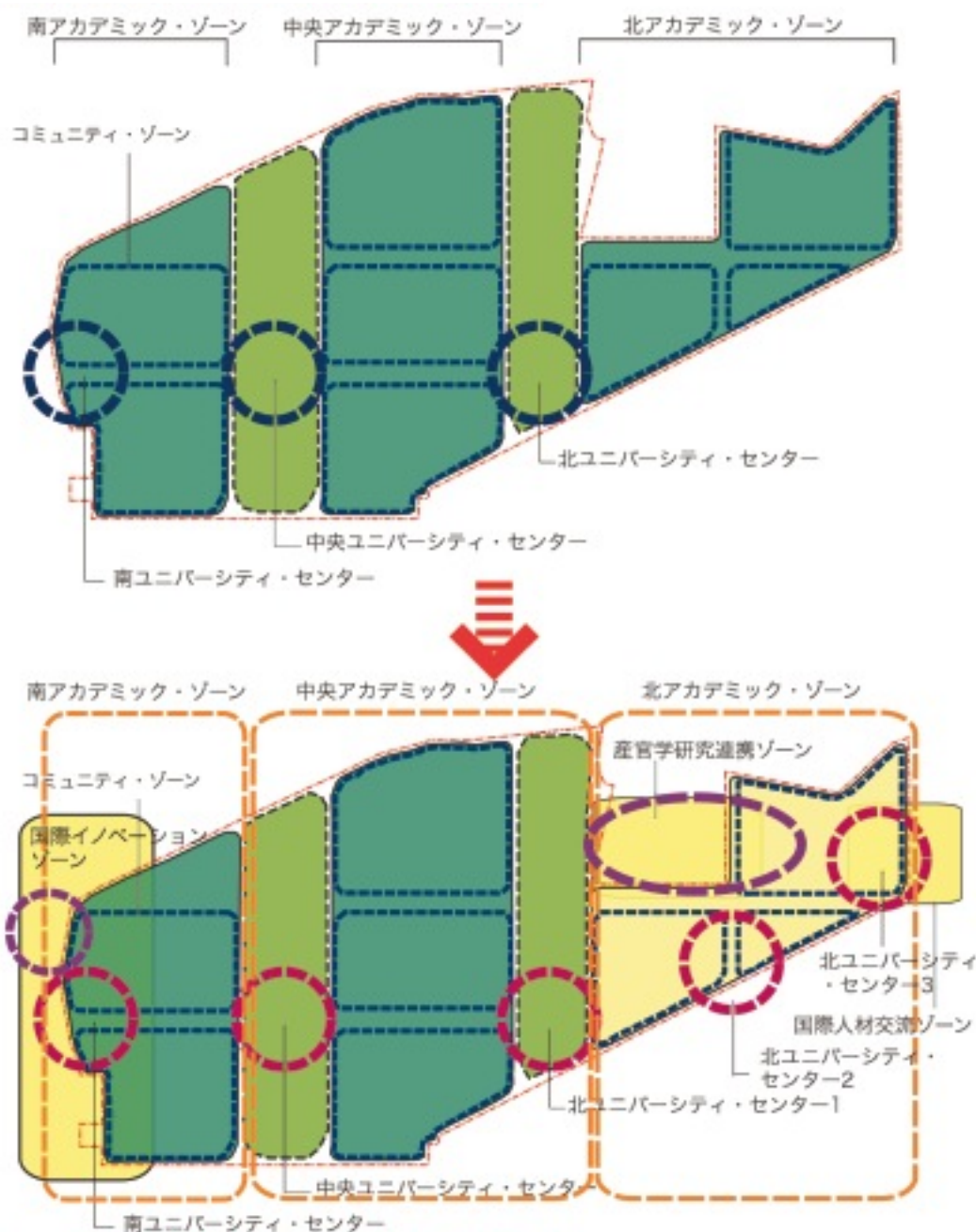


キャンパス空間構成原理（CMP2006）

4-2 空間計画単位

- CMP 96 で示された3つのアカデミックゾーンを大きなゾーニングの骨格としつつ、各ゾーンにそれぞれ現在まで蓄積してきた空間的特徴を活かした整備を行う。
- キャンパス空間のアメニティの向上と空間構成を明確にするために、パブリックスペースを核としたユニバーシティ・センターを各ゾーンに配置する。

キャンパス空間計画単位 (CMP96)



キャンパス空間計画単位 (CMP2006)

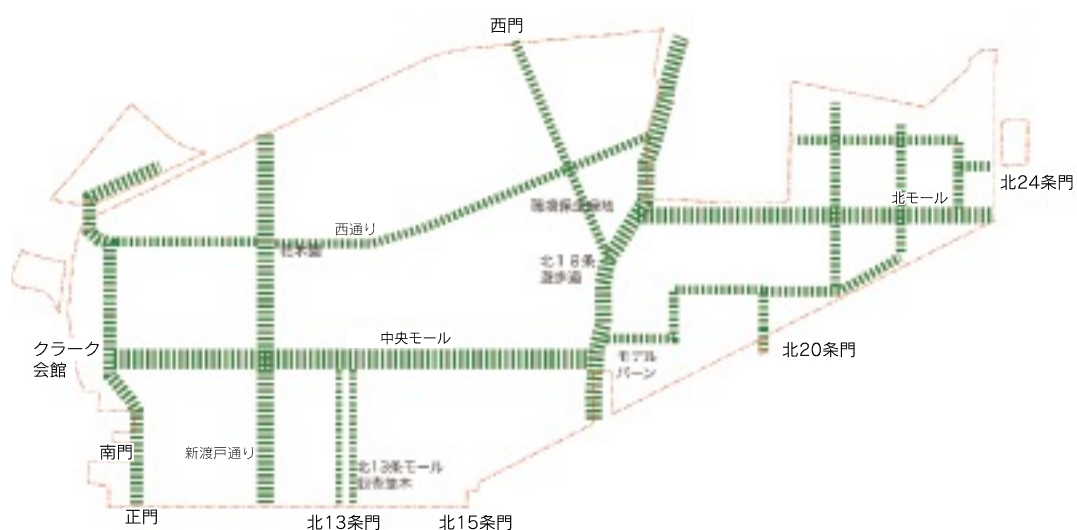
以下にキャンパスの空間計画と必要な基本骨格の構成を示す。

4-2-1 ゲートと交通セル



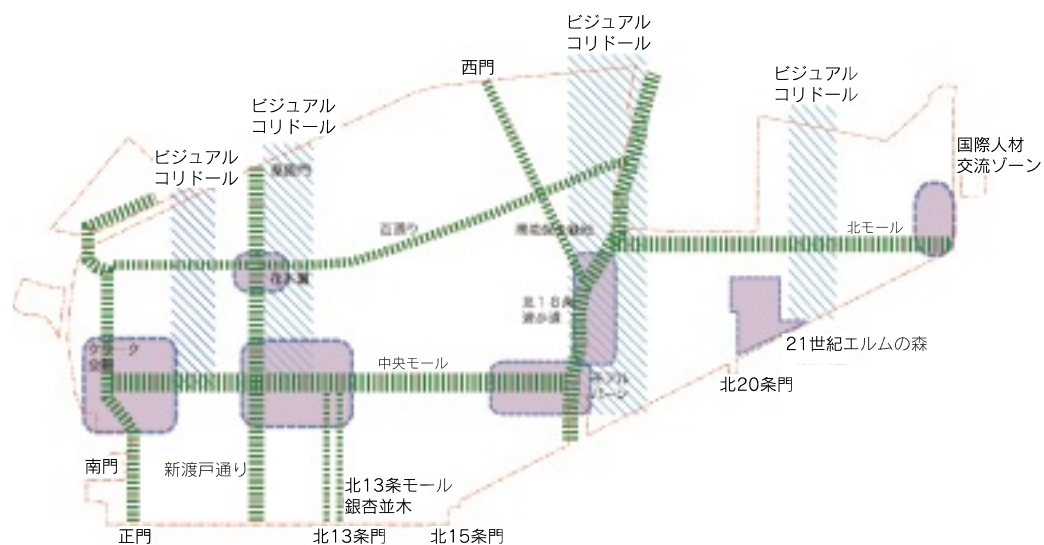
CMP 96 の基本的考え方を継承し、入構車輛はゲートの近傍ゾーンにアクセス・駐車し、キャンパス内の通過交通を抑制し、歩行者動線と車輛動線を交錯させない交通セルを完成させ、キャンパス全体の交通動線の骨格とする。

4-2-2 歩行者動線のネットワーク



CMP 96 における重要な骨格である中央モール、西通りと北モールを南北の基軸として、キャンパス全体の歩行者動線のネットワークを形成する。また、キャンパスを東西につなぐ歩行者動線を南、中央、北ゾーンの副次的骨格とする。

4-2-3 パブリックスペース拠点



主に歩行者動線の結節点の部分は、キャンパスでの様々な交流を支える中心（ハブ）とする。ハブは、活動が活発に魅力的に起こるようなパブリックスペースとして位置付ける。さらに、キャンパス空間の骨格としてビジュアルコリドールを設け、キャンパス内に近景から手稻連山への遠景までを確保できるような施設配置計画のルールを定めたオープンスペースの骨格をつくる。

4-2-4 自然・生態環境の骨格



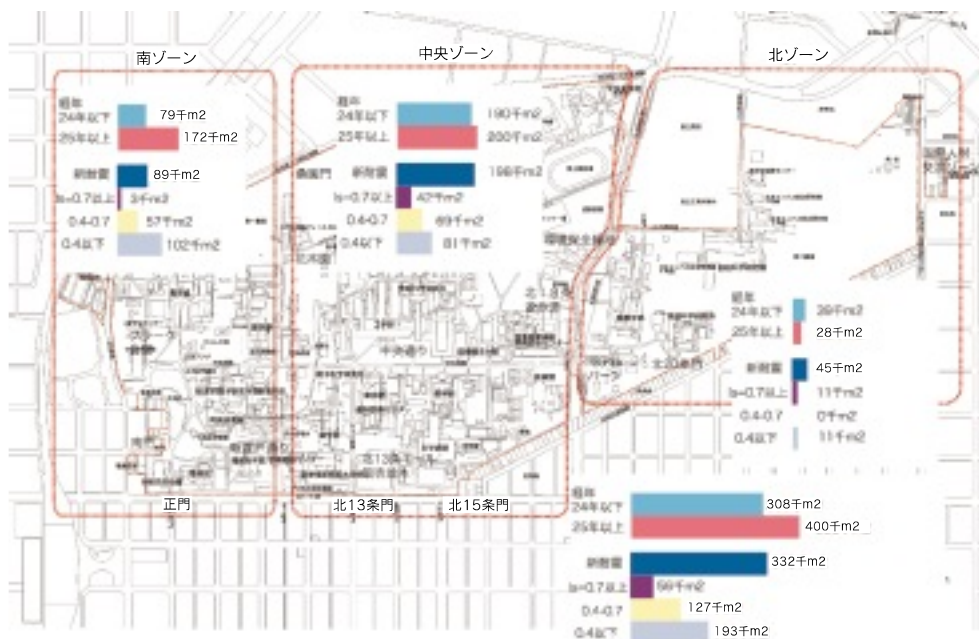
キャンパスが持っている空間的特徴のひとつであり、キャンパスの持続的な発展の基盤を形成するために、生態環境の保全・再生と共に、それらをネットワークする骨格づくりを目指す。

4-2-5 地域連携ゾーン



キャンパス最南端部の「国際イノベーションゾーン」、北海道立工業試験場等との連携を図る「産官学研究連携ゾーン」、北24条の「国際人材交流ゾーン」は、地域と連携しながら整備していくゾーンであり、大学キャンパスと周辺地域の相互のニーズを満たす整備や機能の配置を行う。

4-2-6 施設・環境マネジメント単位



キャンパスは南・中央・北の3ゾーン構成とし、この3ゾーンを基本単位として、施設・環境マネジメントの計画・実現を図る。

4-2-7 フレームワークプランと空間構成



フレームワークプランは、歩行者動線の基本骨格を基盤として、パブリックスペース、環境保全・再生ゾーン、そして、地域連携ゾーンを接続させ、骨太でゆるがな空間構成として構築する。さらに、南、中央、北の3つのゾーンに区分し、そのゾーンごとの教育・研究そして環境上の特徴を活かした整備方針を策定する。

南ゾーン

CMP 96 で位置づけられたキャンパスの最南端部に位置する国際連携ゾーンを大学と地域、さらには、世界とをつなぐ国際的なインキュベーションゾーンとして発展的に位置付け、クラーク会館周辺や中央第二宿舍エリアの高度有効利用を目指し、民間との協働事業を視野に入れた検討を行う。

札幌農学校時代から継承されてきた空間的特徴を保持するように、施設立地に対するコントロールを行う。また、クラーク会館周辺（クラーク像、中央ローン、農学部前庭を含む）の再整備を行い、キャンパス南部の国際的な交流空間を実現する。その際、クラーク会館、古河講堂、旧昆虫学教室、旧農学部図書館等といった歴史的建造物を含めたオープンスペースを一体的な広場として再整備する。

中央ゾーン

キャンパスの中で、最も施設が集中しているゾーンであり、大規模な部局も集中している。また、西側には、環境保全緑地も存在しており、施設・環境マネジメントを中心的に展開しながら、施設の有効利用、エネルギー使用の低減などを旨とする。

パブリックスペースとして学生のためのアメニティ空間の充実を図り、各教育・研究施設とパブリックスペースの連続性を確保する。

環境保全緑地の保全・管理の質を向上させるため、周辺における施設立地の制限、通過車輛の減少等を実施する。

北ゾーン

CMP 96 では、北アカデミックゾーンに、全学の連携によって既存の学部・大学院を超えた産学官共同研究や国際研究交流のための施設を「研究ビレッジ」として配置することを決定した。それらは、既存部局の枠を超えたインターファカルティ化した教育・研究組織に対応して構成され、また全学的な視点から運営していくことを前提とし位置づけられていた。

その後の検討と実際の施設の立地を踏まえ、北ゾーンの多様な研究施設群（＝サイエンス・パーク）を受け入れた土地利用計画では、東西に大きく三区分され、東側から北モール以東の学内研究ビレッジゾーン、北モール～西通り間の産学連携ゾーン、西通り以西の民間資金等活用ゾーンの3つのゾーンによって構成されている。

学内研究ビレッジゾーンについては、現在の農場利用との整合を図りながら順次南側より開発を行っていく。

立地する施設は、南、中央ゾーンより小規模なものが、周囲に緑地を確保しながら配置されていくことを基本とする。

3つのゾーンの特徴としては、

- **学内研究ビレッジゾーン**：新たな構想による学部、部局、教育研究組織の再編統合に対応する建物及び学内共同研究施設等の研究所関連の建物を建設するゾーン。
- **産学連携ゾーン**：産業界と協働した戦略的な研究等、産業界との密接な連携を念頭においた施設で、産学官の共同研究が利用する施設等を建設するゾーン。
- **民間資金等活用ゾーン**：大学の土地を貸与してベンチャー企業のインキュベーション、企業の研究所、共同研究で緊急的に対

応する流動的研究施設及び生活支援施設等を建設するゾーン。

- さらに、現在北ゾーンには未整備のパブリックスペースを埋没河川などといった原地形の特徴を場所の資源として活かし、特徴的な景観の構成を目指して整備する。

4-2-8 パブリックスペースの整備

I. キャンパスの中での役割



キャンパスは、人格形成の場としても大変重要な空間として位置づけられる。その意味でキャンパス計画は、カリキュラムの実施に必要な機能を持った施設群を配置することだけではなく、カリキュラム以外の時間（オフ・カリキュラム）を過ごす場を充実させ、多様で国際的な厚みを持った学生生活空間を整備することで達成されると言える。その空間がキャンパスの中でのパブリックスペースである。

それぞれのゾーンで魅力的な特徴を持ったパブリックスペースをキャンパス内の大きな骨格として整備していくことを CMP 2006 のひとつの戦略として位置づける。

II. パブリックスペースの整備課題

(1) 一般的な課題

キャンパスライフを支えるパブリックスペースは、屋内外のオープンスペースが主体となり、人間中心の場であるべきことから、現在のキャンパスには以下の共通課題が存在する。

- 1) パブリックスペースが、キャンパスの必須空間として十分に位置づけられていない。
- 2) 車、自転車、人の動線が混在している。
- 3) 屋外オープンスペースと建物の関係が明快ではない。

(2) 北海道大学のキャンパスが持つ課題

CMP 96 の中で、3つのアカデミックゾーンを設定し、そのコアに全学共用施設を中核として構成されるユニバーシティ・センターが位置付けられた。さらに CMP 2006 では、南、中央、北の3つのゾーンに対して、パブリックスペースを核としたユニバーシティ・センターを配置するが、それらの空間構成の方向性を明確に示す必要がある。

以下、パブリックスペースを整備する上でのターゲットエリアを3つのゾーンごとに示す。

南ゾーン

CMP 96 でも位置付けられたように、クラーク会館は、本学の建学精神のシンボルであると同時に、卒業生等の寄附金によって整備され、わが国最初の大学学生会館という先駆的な施設として大きな役割を果たし、全国的に評価されてきた施設である。

しかし、現在のクラーク会館は福利厚生施設化し、その周辺は、商用車の動線・駐車場が集積した場となり、また、クラーク会館の諸活動・諸機能も当初の目的とは大きく異なる状態となっている。

クラーク会館を含めて、その周辺をパブリックスペースとして再検討し、再整備することが必要である。

中央ゾーン

キャンパスの中心でかつ、環境的にも北大キャンパスを支える質が形成され、さらには、キャンパスの東側と西側をつなぎ、市街地への接続の歩行者軸にもなる新渡戸通りから北13条モールに挟まれたゾーンがパブリックスペース再整備の重点整備エリアになる。

北ゾーン

南、中央に比べキャンパスの骨格が形成されていない北ゾーンは、道路（車輛、歩行者用どちらも）・オープンスペース・緑地など、パブリックスペースの小骨格となる空間の配置計画を明確にする必要がある。

その際、第二農場が持っていた景観要素と立地する研究施設群との調和を図りながら空間構成を行い、特徴的なパブリックスペースを構成する。

これらの点より以下に示す5つのエリア（第2編6-1パブリックスペース整備方針）において、優先的に検討し、整備を行っていく。